



前世で辛い思いをしたので、 神様が謝罪に来ました 7

α L P H α L I G H T

初昔茶ノ介

Hatsumukashi Chanosuke

アルファライト文庫



従魔たち

ネル



クマミ



クルラ



ウイム



コットン



デリー



パスカル

勇者パーティに
所属していた賢者。
あらゆる属性の魔法を
使いこなす。

リーデル

かつて世界を救った勇者。
卓越した剣技と
炎魔法の腕を
持つ。

Characters
登場人物紹介

レオン

強く頼れる
サキの先輩。
クロード公爵家の
次男。

アネット

サキとフランの妹。
背伸びしたがりで
おしゃまな性格。

サキ

不幸ばかりの前世を
神様に謝罪され、
幼女として異世界転生した。
最近はお店作りや
魔法の研究で
大忙し!

学園のお友達

アニエ

オージェ



フラン

ミシャ



私——雨宮咲の一度目の人生は、不幸続きだった。死に方だって、落雷に打たれるなんていう信じられないものだったし。

だけどそれは神様の手違いによるものだったらしいの。

それを申し訳なく思った神様——ナーティ様は私に謝りつつ、剣と魔法の異世界・シャルズに転生させてくれた。たくさん才能と、頼れる子猫の従魔ネルとともにね。

こうしてサキ・アメミヤとして第二の人生を送り始めた私は、王都エルトにあるアルベルト公爵家の養子になった。

当主のフレル様とその奥様であるキャロル様——今ではパパとママって呼ばせてもらっているけど——そして、二人の子供であるフランとアネットの四人は、私を家族として迎えてくれたの。

それだけじゃない。魔法を習うために通っている学園では、ブルーム公爵家の一人娘で面倒見のいいアニエちゃん、洋服作りが得意で、最近写真を撮る楽しさにも目覚めたミシャちゃん、そしてすぐ調子に乗るけど素直な男の子オージェとも、仲良くなったんだよね。

そうそう、最近では学園一強いクロード公爵家次男のレオン先輩……違った、この間から『レオンさん』って呼ぶようになったんだ。

気を取り直して。レオンさんと一緒に行動することも増えたの。学園の長期休暇を利用

して泊まりがけで遊びに行ったり、一緒に魔道具を売るためのお店を作ったり、いろいろなことをしているんだ。

だけこの間は、大きな勘違いをした結果、迷惑をかけてしまった。レオンさんはそれでも私を気遣って、私のために頑張ってくれたんだ。

そんな一件の中で私はレオンさんが好きなんだって気付いて……うう、ちゃんと言葉にすると恥ずかしいよお！

……それはさておき。お店もオープンしたばかりだし、学園も始まったし、これから大忙し！ 気を抜かないようにしなきゃね！

1 恒例の行事

『たあー！』

観覧席の上空にある大きな画面に、炎を纏った状態で駆け抜けていくアネットが映し出された。

私のお店『アメミヤ工房』が王家と契約をしてからちようど一ヶ月後の今日は、初等科三年生のクラス対抗戦の日。そう、三年生になったアネットのデビュー戦である。

初等科三年生は、二十人のクラスが六つあり、一クラスにつき四チームが作られる。それによつてできた計二十四チームがトーナメント方式で戦うのだ。

競う内容は、『オブジェ破壊戦』。自分と相手の陣営にそれぞれ三つのオブジェが設置されていて、先にそれらを全て破壊したほうが勝ちだ。

ちなみに時間制限もあり、三十分経過した段階で試合は終了。破壊数が多いチームが勝利となる。

いつもの五人——私、アニエちゃん、フラン、ミシヤちゃん、オージェで三年対抗戦を見学しているんだけど、アネットは初戦からずつと破竹の勢いで相手のオブジェを破壊し続けている。

アネットは私から魔法の、クロード家長男のレガール様から体術の特訓を受けていて、しかも努力も欠かさないから、他の同学年の子たちよりも明らかに実力が頭一つ抜けているんだよね。

頭一つどころじゃない気もするけど……。

まあ、そもそも入学する前から私とフランと一緒に魔力操作を特訓しているアネットの相手をするなんて、同学年の一般生徒には荷が重すぎる話ではあるか。

でも、決勝戦の相手は同じく公爵家であるカルバート家の長男、リック様。

彼も同学年の中ではかなりの実力者らしいけど……。

そんなことを考えていると、ちようどリック様とアネットが声を上げる。

『お前たちは両端のオブジェを守れ！』

『あなたたちは全員で右へ！ 真ん中と左は私が受け持ちます！ 確実に落としてくだ
さいまし！』

そうして、アネットとリック様は、対峙する。

『今日も……私が勝つ！』

『今日は……俺が勝つ！』

二人は駆け出しながら、魔法を放つべく構えた。



「^{シグル}第一フレア！」

「^{シグル}第二グランド！」

リックと同時に、私——アネットは魔法を放ちました。

炎の弾丸と土の弾丸がぶつかり、爆ぜる。

この世界には炎、水、風、雷、土、草、光、闇、空間、治癒、特殊という十一種類の魔法属性がありますの。

しかも魔法は、繰り返し使用して経験を積むことでスキル化させたり、発動過程を簡略化させたり、オリジナルの魔法を生み出したりと、応用も利きますわ。

スキル化した魔法は、強さや難しさによって第一から第十まであるナンバースに分類され、どのランクの魔法も一度発動できればその後はずっと使えるのです。

それだけでなく、魔法の飛距離を延ばす【ア】、速度を速くする【ベ】、効果時間を延ばす【セ】、操作性を高める【ア】といったワーズや、魔法に複数の属性を付与するエンチャントなどと組み合わせることでさらに強化できますわ。

とはいえ人によって向き不向きがあるので、一般的には生まれつき魔法が得意だと言われている貴族ですら、多くて五、六種類の属性しか使えませんけれども。ただし、サキお姉さまは特別でして、生まれつき全ての属性への適性があるのですわ！

そして私とリックは、お互い炎魔法と土魔法を第一級にスキル化しておりますの。

しかし、悔しいですがリックの方が魔力量は上……持久戦になつては私が不利ですわ。

「^{ダアル}アプレント第二グランド！」

リックが地面に手をつくると、周囲の地面から土が蔓のように伸びて私に向かってきます。そのナンバースのスキル化ができていなくとも、【アプレント】を頭に付けて唱えれば持続力などは下がるものの、威力はそのままに魔法を発動させられます。おまけにこれによって、早くナンバースとして習得してスキル化できると教えられていますの。

これまでは第一級の魔法しか使っていなかったのに……驚きですわ！ リックもこの決勝戦に備えて新しい技術を身につけているということみたいです。

でも、私だって！

私は目を凝らし、相手がどのような魔法を使うかを読み、最小限の動作で避けてみせます。

「何っ!？」

驚くリックを見て、内心ほくそ笑みます。

ネルちゃんの言う通り、動きがよく見えましたの！

前にネルちゃんと戯れている時に言われたことを指針にして、トレーニングをしてきて、正解でしたわ。

ネルちゃんは私に『アネット様の目は私の目と似てますね、動きを素早く捉える猫の目です』と言っていました。それから速く動くお姉様をひたすら目で追うように心がけた結果、私は一つのスキルを得ましたの。

「これが私のスキル、【猫の目】ですわ！」

このスキルと鍛えた魔法で、リックを倒しますの！

猫の目は動体視力や周辺視野を向上させ、物の動きを正確に捉えるスキル。

土魔法は攻撃速度の遅いものが多いから、猫の目を使えば、さほど速く移動できない私でも正確に避けられるのです。

「くそっ！ 当たれ！」

リックはそう叫びながら、私に向かって土魔法を何度も放ってきます。

しかし、それでも私には当たりません。

すると、今度は手数が増していきます。

すごい魔力量……やはり油断できませんね。

ですがリックは体術が苦手ですし、接近戦に持ち込めば、押し切れますの！

「アプレント第三フレア……」

炎を……引き延ばすように……。

頭の中で魔法で作り出すものを丁寧に想像し、そして……発動する。

「【炎の鞭】」

やった！ 上手くできましたの！

私は内心魔法がしっかり発動したことに喜びながらも、炎でできた鞭を飛んでくる土の弾に向けて振ります。

土の弾に触れた瞬間、炎の鞭は爆せてリックの魔法を粉々にしました。

「なん……だと」

リックは、驚きを隠せない様子です。

「これはお姉さまからの教えを昇華して生み出した、私のオリジナル技ですわ。圧縮した

炎をしならせて振るい、触れた対象を爆発させますの」
お姉さまの教えを守り、私なりに悩みなから練習を重ね……気付くと身についてしま
たの。

ネルちゃん曰く、この歳にして自力でオリジナル技が使えるようになるのはとても珍
しい、とのこと。

つまりこれは……私とお姉さまの絆の結晶！

負けるわけがないんですの！

「負けてたまるか！」

そう口にしなからリックが撃ってくる魔法を炎の鞭で壊しながら、私は距離を詰めます。
そしてリックの間に合点に入る直前に、私は鞭を地面に叩きつけました。

砂埃が立ち、リックはキョロキョロと周囲を警戒しています。

でも、猫の目でリックの動きはお見通し！

私はリックの死角に回り、構えます。

足で地面を掴み、踏み込みながら腰を回し、力を腕へと伝える。そして、手に集めた魔
力を叩き込むんですの！

「エルト国式体術・一番【衝歩】！」

「がはっ！」

私の掌が、リックの横腹に突き刺さりました。

リックは苦悶の表情を浮かべながら、倒れます。

レガールさまから教えていただいた体術と、お姉さまから教えていただいた魔法と魔力
操作……全てを使い、リックを倒したのです！

見てくださいましたか、お姉さま……アネットも少しはお姉さまに近づきましたでし
うか。英雄の妹にふさわしい動きが、できていたでしょうか……。

さつきまでの自分の動きを頭の中で反芻してから、首を左右に振る。

こんなことで満足してはいけませんわね、お姉さまへの道はまだまだ遠いんですの！
私は少しだけ浮ついてしまった心を治めて、オブジェを破壊しに向かうのでした。



アネットのチームがリック様のチームを倒し、三学年クラス対抗戦で優勝したのを見届
けて、私——サキはほっと息を吐いた。

「はあ……」

アネットは昨日までずっと魔法の特訓とか、作戦の考案とかを夜遅くまでしてたから、
もしこれで負けちゃったらと思うと、心配でしょうがなかったんだよね。

「アネットちゃん、すごい活躍だったわね」
 「本当に。いったい誰に似たんだか」

フランはアニエちゃんの言葉にそう答えてから、『君のことだよ』と言わんばかりに私の方を笑顔で見つめてくる。

私はふいつとそっぽを向く。

「きつとフランでしょ。接近戦の前に地面を爆破して視界を奪う作戦とか、発想が同じだもん」

「いやいや、僕ならもつと確実な方法を選ぶよ。あれは、地面が土じゃないと採れない手段だしね。アネットは地面が土かどうかなんて、きつと考えていなかったさ」

「じゃあフランならどうするんすか？」

そんなオージェの言葉に、フランの瞳がきらつと光る。

そこから男の子二人は、戦術について話し込んでしまう。

まったくもう、これだから男子は。

「でも、あの魔力コントロールの繊細さはサキちゃんを思わせるものがありましたよ」

ミシヤちゃんにそう言われて少し誇らしい気持ちになり、私は胸を張る。

「私が教えた魔力コントロールの練習を続けていたからね」

そんな風に話をしていると、画面にアネットが映し出された。

『えーそれでは、大会中最もオブジェを破壊した選手、アルベルト家のアネット選手にインタビューです！』

『今日はMVP間違いなしの、すごい活躍でしたね。今のお気持ちをどうぞ』

インタビュアー二人にマイクに似た魔道具を向けられたアネットは、満面の笑みで答える。

『まずは私に技術を教えてくださったクロード家のレガルさまに感謝を。そして……お姉さま！ アネットはやりましたの！ あの素晴らしい魔法も、魔力の扱いも全てお姉さまの確かつお優しいご指導のおかげです！ 本当にお姉さまの指導は——』

そこからアネットの姉語りが始まってしまふ。

私は顔から炎魔法が出そうなほど恥ずかしくなつて、顔を両手で覆うしかなかった。

「まったくもう……」

私が火照る頬に手を当てながらそう呟いたの聞き、アニエちゃんが優しく微笑む。

「ふふ……アネットちゃんは本当にサキが好きね」

「それは嬉しいことだけども……」

姉離れができるのか、私は心配だよ……。

もう一度ため息を吐く私を横目に、アニエちゃんは手をパンと叩く。

「さてと、私たちも頑張らないとね。明後日の対抗戦」

「うん！」

五学年の私たちの対抗戦は、明後日だ。

アネットは私と代表戦に出るのに憧れているので、私も頑張らないと。

「それに、五学年だからアレもあるしね」

「ああ、アレね」

フランとアニエちゃんは頷き合っているが、私はなんのことかわからず、首を傾げる。

「アレ？」

「サキは知らないの？ 五学年は対抗戦の他にもう一つ行事があるのよ」

「え、何それ？ 知らない！」

「学習発表会。生徒が自分たちで劇を作って、披露するの」

私はちよつと予想外なアニエちゃんの返答に、キョトンとしてしまった。

二日後、私たちは苦戦することなく対抗戦で優勝したんだけど、そのさらに翌日。ホームルームで、先生が言う。

「はい、皆さん。今年も対抗戦お疲れ様でした。今年もうちのクラスのサキちゃんはM

VPに選ばれたので、春の代表戦に出場します。拍手」

クラスみんながバチパチと拍手してくれるので、照れてしまう。

「そして、皆さんにももう一つ、学習発表会というイベントに参加してもらいます」

先生はそう言いながら黒板に『学習発表会』と書いたあと、その下にも何かを簡条書きにしていく。その内容は先生の体に隠れて、よく見えない。

「毎年、五学年はこの学習発表会で劇の発表をしています。題材は毎年決まっています。

皆さんのよく知る、勇者伝説です」

先生が少し横に移動すると、『アクアブルムの戦い』や『旅立ち』、『魔王との戦い』といったワードが全部で六つ書かれているのが見えた。

「各クラスがこれら六つのテーマの中から一つずつ劇にして、披露します。劇の内容、練習日程、演出に衣装まで全て皆さんで考えて作るんですよ？ そして私たちのクラスが披

露するのは……『魔王との戦い』になりました」

クラスみんなが「おお」と声を上げる。

いいテーマだったってことかな……？

勇者伝説にあまり詳しくない私は、共感できないので微妙な顔をするしかない。

「それではここからは、クラス長のアニエちゃんに引き継ぎますね」

先生はそう言ってアニエちゃんをニコニコと見つめる。

アニエちゃんは領いてから、教室の前に出て話し始める。

「それじゃあここからは私が進行するわ。私たちのクラスは全員で二十人。必要な役割は作家、演者、衣装、小道具、演出……などなど。意外とやることは多いわ。だから、一人二つ以上役割があるって覚悟しておいて。で、早速だけどざっくりと決めていきましようか」

「はい！ 私は作家と衣装係でお願いします！」

いつもは控えめなミシヤちゃんが、すかさず手を挙げた。

その様子を見て、アニエちゃんが苦笑いしつつも頷く。

「適任だと思うわ。それじゃあ次に演者を——」

アニエちゃんが喋り終える前に女子からフランの名前が、男子からは私の名前が挙がる。

「僕？」

「わ、私っ!？」

フランはまんざらでもなさそうだけど、私は首を横にぶんぶん振る。

「む、無理だよ！ 人前で演技なんて無理！」

すると、フランとオージェ以外の男子から「えー」と声上がる。

だけど、アニエちゃんは優しい声で私に聞いてくれる。

「それじゃあサキは何がしたい？」

「え？ えつと……え、演出とか……」

私が小さな声で言うと、アニエちゃんはサラサラと黒板に『演出…サキ』と書いた。

放課後。

今はミシヤちゃんを除く四人で、研究所の私の部屋に集まっている。

あのあと、役割決めは順調に進んだ。

なぜか演出係の希望者は男子が多くて、アニエちゃんが困っていたけど……。

アニエちゃんは、呆れた声を上げる。

「それにしても、サキの人氣はすごかったわね。あんなに演出希望者が多くなるなんて」

え、そういうことだったの!? なんで……?」

フランが、ニヤニヤしながら口を開く。

「サキは僕らの学年のエースだからね」

「うー……みんなも早く強くなってよ……」

「手厳しいっすね」

そんなオージェの言葉にみんなで笑っていると、扉が開く。

そこには、本を数冊抱えているミシヤちゃんがいた。

「お待たせしましたー。これがうちにある勇者伝説の本です」

いつも放課後はトレーニングをしているんだけど、今日は研究所で勇者伝説のおさらいをしようということになったのだ。

家に本を取りに行ってくれたミシャちゃんが席に着くのを待って、みんなにオラジのジュースを用意してから、話し合いスタート。

「それにしても、劇なんてどうやって作るんすか？」

「さあ……？ 去年誰か見に行った人はいるの？」

「いいえ。先生に聞いたんだけど、この行事を始めた時から、四学年より下の学年の子は見に行っちゃダメだって決まっているらしいわよ。先輩の劇を見ちゃうと、似たようなものになっちゃうからって」

フランの質問に、アニエちゃんはそう答えた。

なるほど、模倣するんじゃないくて、自分たちでゼロから作ることを大切にしているんだね。「まず、皆さんは勇者伝説についてどこまでご存じですか？」

ミシャちゃんの質問に、アニエちゃん、フラン、オージエがそれぞれ口を開く。

「勇者パーティの伝承話をテーマに、何人もの作家さんが本を書いていて、それぞれ微妙に内容が違うのよね。私は一人の作家さんのしか読んでないけど、一応最初から最後までの流れはわかるはずよ」

「僕もそんな感じだね」

「俺は……」

「あんたはどうせ本なんて読まないでしょ」

アニエちゃんに凶星を指されたようで、オージエがたじろぐ。

「うっ……た、確かに本は読まないんですけど、紙芝居とか読み聞かせとかで内容は把握しているつもりっすよ！」

「本当に？？」

疑わしげなアニエちゃんを見て笑いながら、フランが聞いてくる。

「ははっ。サキは？ どこまで知ってる？」

「私は正直、全然わかんないんだよね」

本はよく読んでいるけど、魔術書や、この世界や国のことについて書いてあるものばかりだったし。

「そうなんですか。それじゃあ一旦私が知っている内容を教えますから、そこからみんなですり合わせていきましょう。全部をすり合わせるとなると時間がかかりすぎちゃうので、今回は私たちの劇のテーマである『魔王との戦い』部分に絞ります」

それからミシャちゃんは一冊の本を手に取り、昔話を読み聞かせるような口調で語り出した。

◆
昔々、私たちが生まれるよりもずっと昔のお話です。

勇者一行は旅を続けていました。

前回の旅の傷を癒やした勇者たちが向かうのは最初の街よりもっと北、一年中雪が降る街・リベリカ。

「ここがリベリカ……か？」

勇者は驚きのあまり、その声を漏らしました。

白い息も凍りそうな極寒の中、勇者一行が目にしたのは、崩れた家々を、ボロボロの衣服に身を包んだ人たちが掘り起こしている光景だったのです。

「いったい、何があったんだ」

「魔王が現れたのじゃ。街を壊し、怪我人も死人もたくさん出た。その上で魔王は、家々から食料と金を奪い、北にある城へと去っていった……」

勇者の疑問に答えたのは、一人の老人でした。

老人は瓦礫を退ける手を止めず、目には涙を浮かべながら悔しそうな表情をしています。

勇者は、拳を強く握ります。

なんと惨いことをするのか、この街の人たちに、いったいなんの罪があるのか。

そんな思いを呑み込み、勇者は老人の手伝いを始めました。

勇者の仲間たちも、手を貸します。

賢者は皆が寒くならないように空気を暖かくする道具を作り、怪我も治しました。

戦士と弓士と勇者は崩れた家の片付けと修復に当たります。

リベリカに住む人々は、数日で普通に生活できるようになりました。

勇者たちはテントの中で話し合いを始めました。

膝を突き合わせてリベリカの現状を整理したあと、勇者は仲間たちに言いました。

「明日、俺たちの本来の仕事をしよう」

勇者の言葉に、仲間たちは頷きました。

それから勇者たちは魔王が去っていったという北の城へと向かいます。

その道中、たくさんさんの魔物たちが現れますが……。

速さに秀でた狼の魔物は賢者の魔法で切り抜け、力の強い熊の魔物は戦士の剛力で薙ぎ倒し、空を駆ける鳥の魔物は弓士が正確に射抜きます。

やがて、とうとう勇者たちは魔王の城へとたどり着きました。

城の中に入ると、その最奥で玉座に座る魔王が立ち上がり、口を開きます。

「クッククク……よくここまでたどり着けたな」

勇者は剣を引き抜き、魔王に鋒を向けました。

「街の人たちにしたことは、許されることじゃない」

「だとしたらなんだ？」

「俺たちがお前を止める」

こうして、魔王との激しい戦いが幕を開けました。

魔王は闇魔法が得意。そしてその一種である影魔法は、大層強力でした。自在に形を変える影は時に鋭い槍に、時には強固な盾になり勇者たちを追い詰めます。

しかし、それより勇者を追い詰めたのは――

「この程度か？ 勇者と言っても所詮は田舎の街で大きいイカを倒しただけのガキか」

「はあ、はあ……お前、俺の仲間は何をした！」

魔王は狡猾にも闇魔法で勇者の仲間の体を操り、勇者と戦わせたのです。

魔王の魔法に操られる仲間たちを、勇者は攻撃できません。

やがて勇者は、これまで何度も危機を救ってくれた戦士の剛腕によつて倒されます。

もう殺されるのを待つのみ。意識が朦朧とし始めた勇者の耳に、聞いたことのない声が響きます。

『大丈夫かい？』

「大丈夫な……ものか」

『怪我が痛むのかい？』

「俺の怪我なんて……どうでもいい。見ろ……仲間たちの苦しそうな顔を……意識を残したまま仲間と戦わねばならぬなんて……さぞ悔しいことだろう」

「誰と話をしているんだ？」

勇者のただならぬ様子に、魔王は問いかけました。

しかし、勇者には魔王に返事をする余裕もありません。

『まだ動けるかい？』

「ぎりぎりだ……でも、動く」

『じゃあ、僕が力を貸そう。僕の名前を呼ぶんだ。僕の名前は……』

「……まあいい。やれ、貴様らの手で勇者を殺すのだ」

魔王が指を鳴らすと、仲間たちは再び勇者に襲い掛かります。

しかしその時、勇者が叫びます。

「シャイン！」

勇者の手に握られた剣が、輝きを放ちました。

そのあまりの眩さに、魔王は顔を覆います。

それだけではありません。光に照らされた仲間たちは、闇魔法から解放され、倒れたのです。

勇者は最後の力を振り絞って立ち上がり、再び魔王に鋒を向けます。
先ほどまでの余裕はどこへやら。魔王は慌てふためきながら、勇者に向かって影の槍を飛ばします。

勇者が剣で槍を払うと、槍は霧と消えました。

「これで終わりだ」

勇者は魔王が飛ばす影の武器を払い落としながら駆け、剣で魔王の胸を貫きます。

「かはっ……まさか、シャインに選ばれるとはな……。私は……貴様に負けたのではない……シャインに……光の精霊に負けたのだ」

魔王はそう言い残して倒れました。

勇者の皆を思う気持ちで光の精霊シャインを呼び、勇者たちの身を守ってくれたのです。その後、勇者たちは奪われた金品を手に取りペリカへと戻り、それらを住民へと返します。街に戻った一行は住民からたくさん感謝と称賛の声を受けました。

しばらくリベリカで怪我と疲れを癒やすと、勇者たちは住民に旅立つことを告げます。
惜しまれながらも勇者たちはリベリカをあとにし、旅を続けるのです。



「ふう、これが勇者伝説の『魔王の戦い』部分ですね」

ミシャちゃんは小さく息を吐いてから本を置き、オラジのジュースを飲んだ。

私——サキは拍手する。みんなもそれに続いた。

「うん、僕の知ってるお話とほとんど一緒だ」

「私も」

フランの言葉に、アニエちゃんが頷いた。

しかし、オージェだけ首を捻っている。

「俺が知っているのとはちょっと違うっすね。確か勇者はもっとバシバシ剣術を使って魔王と戦ってた気がするっす」

「あんたが好きそうな内容ね……」

すると、フランが聞いてくる。

「勇者様は普通の剣士よりも大きな剣を使ってたっていうのは知ってるかい？」

「あ、うん」

オージェは以前勇者様に憧れて、武器を使う授業で振れもしない大きさの剣を使っただよね。それで知った。

「戦士は、勇者様との力比べの結果、仲間になったんだよ」

フランの言葉にアニエちゃんが続ける。

「そ、どちらが大きい剣を振り回せるかっていうね。ほんと、今も昔も男子ってなんでそういうのが好きなのかしら」

「ふふっ、そこが可愛いところだったんじゃないですか」

ミシャちゃんがよくすと笑いながらそう言くと、アニエちゃんは渋々（しぶしぶ）といった表情で頷く。

「まあ、そうかもしれないわね。それはさておき、劇に落とし込むならミシャの話に沿って進めるのがいいかしら。剣劇もいいけど、魔法を使つた方が授業の成果を活かせそうじゃない？」

「だとしたら、演出が重要だね。剣劇が少なくなるぶん、別のところで派手さを出さないと」

そんなフランの言葉を聞いて、アニエちゃんは顎に手を当てる。

「でも、役者が実際に魔法を放つなら、危ないからあんまり大規模な魔法は使えないわよね。迫力が出せるのかしら？」

「うーん……でも『魔王との戦い』をやるなら、やっぱり勇者様と魔王の戦いの迫力は重要な要素になりますよね」

「それならやっぱり剣劇多めのやつにするっすー！」

「でも僕たちがちよつと剣劇を練習したところで、どっちみち迫力が出ないんじゃないかな？」

フランの指摘に、オージェは口を失らせる。

確かに今から剣の稽古をしたところで、クオリティがそこまで上がるとは思えないかも……それに光の精霊の力を借りて魔王を倒すのに、剣劇がメインになるっていうのも、主軸がブレそう。

「大規模な魔法を、出演者以外が使うとか……？」

アニエちゃんの呟きを聞いて、オージェが手を挙げる。

「それなら、サキに横からドーンとすごい魔法を撃ってもらうっすー！」

「役者に直撃させないようにはできるでしょうけど、会場が壊れちゃうんじゃないですか？」

ミシャちゃんは苦笑いしながら、そう口にした。

でも、オージェの言う通りドーンと大迫力な魔法を見せられたら、いいよね。

マジックショーみたい……あ。

「そうだ」

私は思いついたことを紙に書いていく。

そしてそれを見んなに見せた上で、実演してみせた。

すると、オージェとアニエちゃんが興奮したように言う。
「す、すげーっす！ めっちゃかっこいいっす！」

「うん！ それなら会場が壊れることはないし、迫力も出るかも！」
そんな中、ミシャちゃんが心配そうに顔を覗き込んでくる。

「でも、それだとサキちゃん一人で演出をやらなくちゃいけませんし、大変じゃないですか？」

「ちよつと大変そうだけど……頑張る」

「あ、それじゃあ魔石工学を使った魔道具を地面に先に置いておくっていうのはどう？
ほら、初めて私がサキと模擬戦した時に使ってたやつみたいな」

「それならサキの負担も減るし、稽古もしやすくなるね」

アニエちゃんとフランの言葉に、みんなが頷いた。

そして、ミシャちゃんは胸の前で両拳を握る。

「じゃあ脚本も、うんとド派手なものにしても大丈夫そうですね！」

「ほどほどにしときなさいよ？」

そうアニエちゃんと言い、みんなで笑い合った。

そこからもみんなでどんなアイデアを出し合った。

明日、クラスのみんなにもここで出たアイデアを共有して、意見を聞いてみよう。

こうやって行事をみんなで企画するのって、すごく楽しい！

2 王様へのお披露目

劇についての話し合いをしてから、一週間後。

今日は、みんなでアメミヤ工房の私の部屋に集まっている。

「ああああ……どうでしょう……」

ミシャちゃんは、弱気な声を上げながら机に突っ伏した。

台本はあらかた作り終わったって言っていた気がするけど……。

「ミシャは何を悩んでるの？」

アニエちゃんの質問に答えたのは、オージェだった。

「衣装のイメージが固まらなくて悩んでるっす」

「なるほどね。いつも通り、ミシャのセンスに従って作ったらいんじゃない？」

アニエちゃんが肩を叩いてそう言うのと、ミシャちゃんはガバツと起き上がる。

「いいえ！ そういうわけにはいきません！ 聞けば二組と四組は衣装にかなり力を入れてるらしいですから！」

「大丈夫よ。ミシャの服はどれもオシャレなんだし」
「んー……！」

そう口にしたアニエちゃんに再び肩を叩かれ、納得いかないといったように両手を上下にぶんぶん振るミシャちゃん。

こういう時のミシャちゃんって、結構子供っぽいんだよねえ。

「もつとこう……イマジネーションが刺激されるようなことがないと、ダメです！」

「わかったから、とりあえず落ち着きなさい」

「……そうします」

ミシャちゃんはそう言って、私に抱きつくようにして胸に顔を埋め、深呼吸する。

「えっと……ミシャちゃん？」

「サキちゃん成分を補給すると、落ち着きます」

ミシャちゃんはよくこう言って、私の匂いを嗅いでくるんだけど……そんな特徴的な匂いがあるの？

自分の袖をクンクンと嗅いでみる。

そんな一連の流れを見て、アニエちゃんは苦笑いしつつ口を開く。

「サキ……真面目に取り合わなくていいから。にしても、インスピレーションって言うてもねえ」



「でもまあ、台本は完成したんだからゆっくり考えられるわけだし、急ぐ必要はないよね」

フランはそう言うけど、ミシャちゃんは首を横に振る。

「ダメですよ！ 服作りにおいては、時間なんていくらあっても足りないんですから！」
学習発表会はおよそ三ヶ月後。

準備期間である今は午後に劇の準備に充てられることになっているけど、午前中は普通に授業がある。確かに時間に余裕があるとは言えないかも。

ミシャちゃんが気合を入れて作ることは、服の構造が複雑になるだろうし。

うーん……あ、そうだ。

「そういえばもう少ししたら、一週間お休みがあるよね」

私がそう言うと、アニエちゃんが怪訝そうな顔で頷く。

「え？ ええ、確か先生たちの研修があるとかで授業はお休みよ」

「それじゃあ、行ってみる？」

「どこに？」

「インスピレーションが湧きそうなところ。劇の舞台になった街——雪の街・リベリカへ！」

私の提案に、四人ともが目を輝かせる。勇者について少し調べておいてよかった。

よし、決まりだね！

次の日。今日は学園がお休みなので、アメミヤ工房の作業場に来ている。

作業場には元孤児で、今はアメミヤ工房の従業員のキールもいる。

「それじゃあキール、このリストに載っている魔道具を用意しておいてくれる？」

私が渡した紙を見て、キールの顔が青ざめた。

紙には劇で使う魔道具の設計図が書かれていて……確かにちよびっと？ 作るのが難しい気がする。

「こ、こんな複雑なもん、簡単に頼んでくんないよ！ それに、なんだよこの量！」

キールはそう言って紙を突き返そうとするが、私はにっこりと笑う。

付き合いが長くなってきたこともあって、キールの扱いはなんとなくわかってるのだ。

「大丈夫、大丈夫！ 今のキールならこのくらい余裕だって！」

「いやいやいや、さすがにこんなもんは……」

私はキールの言葉に被せて続ける。

「だってキールはすごい魔法陣を描くようになったし、お客さんからの評判もいいし……
確かにこれは少し難しいかもしれないけど、今のキールならできるって私は思うんだ」

キールはその言葉に、にやにやする。

「そ、そこまででもないぞ。俺なんてサキ姉と比べたらまだまだだし……」

くつ……もう一押しか……。攻め方を変えよう！

「そっかあ……それじゃあしようがないね」

私が紙を手にとると、キールは少しホッとしたような表情になる。けれど、私はまだ諦めてないんだよ！

「あーあ、せっかくこれ全部できたら、キールに特別ボーナスを出しちゃうと思うたのになあ」

キールがピクツと反応する。

街から連れ出してもらった感謝が大きすぎたのだろう、キールは最初家に来た頃は『お金なんていらない！』って感じだった。

けど、働くことを覚えてからは意外とお金の管理を徹底するようになったんだよね。

「ち、ちなみにどんくらい出る予定だったんだ……？」

お、かかった！

金額をそつと耳打ちすると、キールは少し驚いてから真剣な顔つきになる。

頭の中で計算しているんだろう。

「でもまあ、キールが無理って言うならしょうがないね……」

「ちよ、ちよつと待てよ、サキ姉！」

私とその場を去ろうとすると、キールが引き留めてくる。

そして、紙を私の手から奪い、言う。

「そ、そういえば今の案件が予定より早く終わりそうなんだった！」

「そうなの？」

「お、おう！ だからこれ、やれるぞー」

「ありがと！ それじゃあ私は、これからレオンさんと王城に行ってくるね！」

そんなタイミングで、レオンさんの声がする。

「サキ、準備はできたかい？ そろそろ時間だよ」

「はい！ 今行きます」

今日は王様たちに新しく作った商品を見てもらい、王城へ行く用事があるのだ。

私はニコニコでレオンさんの元に小走りで向かい、目がお金マークになってるキールを残して王城へ向かうのだった。

そこまで距離もないし、レオンさんと一緒に歩くのが好きなので、王城へは徒歩で向かうことにした。

「キールとずいぶん楽しそうに話していたね。何を話していたんだい？」

「ちよつと頼み事をしたんです。学習発表会の小道具を魔石工学を活かして作れたら面白いかなって思ってた」

私がキールに頼んだのは三十センチ四方の布状の魔道具。踏むと闇魔法が発動するようにしてもらったつもりだ。

布を置いた位置さえ覚えてもらえば、演者に演技に集中してもらいつつ演出を加えられるだろう。

「ああ、なるほどね。劇か……懐かしいな。無理やり勇者役をやらされたのを覚えてるよ」

「ふふ、なんとなく想像できます」

「サキも演者をやるのかい？」

レオンさんの質問に、全力で首を横に振る。

「まさか！ 私は裏方でいいんですよ。まあ男子から名前を挙げられてしまいましたけど……」

「はは！ 名前を出した男子の気持ち、わからなくはないなあ」

「ええ……？」

楽しげに笑うレオンさんに対して、私は首を傾げた。

それからも他愛のない雑談が続いていると、あつという間に目的の王城に到着。

門を潜り、王様の部屋に行くと王様と王妃様、二人の娘で私の弟子でもあるプレシア、

パパとママが待っていた。

「おう！ お前ら、よく来たな！」

よつ、と手を挙げる王様を見て、『この王様つばくなく振る舞いにも慣れてきたなあ』としみじみ感じる。

王妃様はおでこに手を当てて、「はあ」と息を大きく吐いているけど。

……王妃様も大変だなあ。

ちなみにプレシアは苦笑いしている。

「今日はわざわざありがとう」

気を取り直してそう口にした王妃様に続いて、王様が身を乗り出す。

「早速何を作ったか見せてもらおうか」

内心張り切りつつ、口を開く。

「ここじゃ狭いので、外でお見せしてもいいですか？」

「狭い？ そんなに大きなものなのか？」

「大きい……といえば大きいですけど」

「見た方が早いってことだな。よし、庭に行こう」

こうして私たちは庭へと移動した。

私は収納空間から、新商品を取り出す。

「これは……馬車か？」

「でもお父様、お馬様をつけるところがありません」

「それに車輪しやりんが見たことないほど大きいですね」

そう口にした王族三人と、パパとママも私の取り出した道具を興味津々きうみんじんといった様子で見ている。

「サキ、これは？」

代表して聞いてきた王様に、私は答える。

「これは馬を使わない馬車……自動車です」

レオンさん以外の人が首を傾げた。

そう、新商品は魔力をエネルギーとして走る車。

遠出をしたくても馬車を使うとなると、どうしても移動できる距離に限界があるからね。見た目は車高が高めの四角いただの自動車って感じだけど、いろいろ工夫してある。

王様は最初こそ戸惑とまどっていたようだが、すぐさま聞いてくる。

「馬を使わない……ってことは、こいつは自走するの？」

「そうです。なんなら自動的に目的地に向かうことだってできるんですよ。乗ってみます？」

「おう！ 扉がいくつかあるようだが、どこから乗ればいい？」

立ち読みサンプル はここまで

「そうですね……まずは私が運転してみますので、隣となりに座ってみてください」

「わかった」

頷く王様の隣で、プレシアが手を挙げる。

「私も前に乗りたいです！」

「それじゃあ僕たちは後ろに乗りましょうか」

レオンさんの言葉に、王妃様が頷いた。

「そうですね」

こうして王様とプレシアと私は前方の席に、他の人たちは後部座席に乗り込んだ。

「この扉はなんですか？」

運転席に座る私の隣——助手席に座る王様の膝の上にいるプレシアが、後ろにある扉を指差す。

前世の車と違い、この車は前方と後方のスペースが扉によって区切られているのだ。

「この扉を開けると、レオンさんたちがいる後ろの席に繋がつながってるんだよ。中がちょっと特殊な作りになってるから、扉で分けてるの」

「なるほど……あとで後ろにも行ってみてよろしいですか？」

「もちろん。ぜひ感想を聞かせてね」

「それより、早く動かしてみよーぜ」